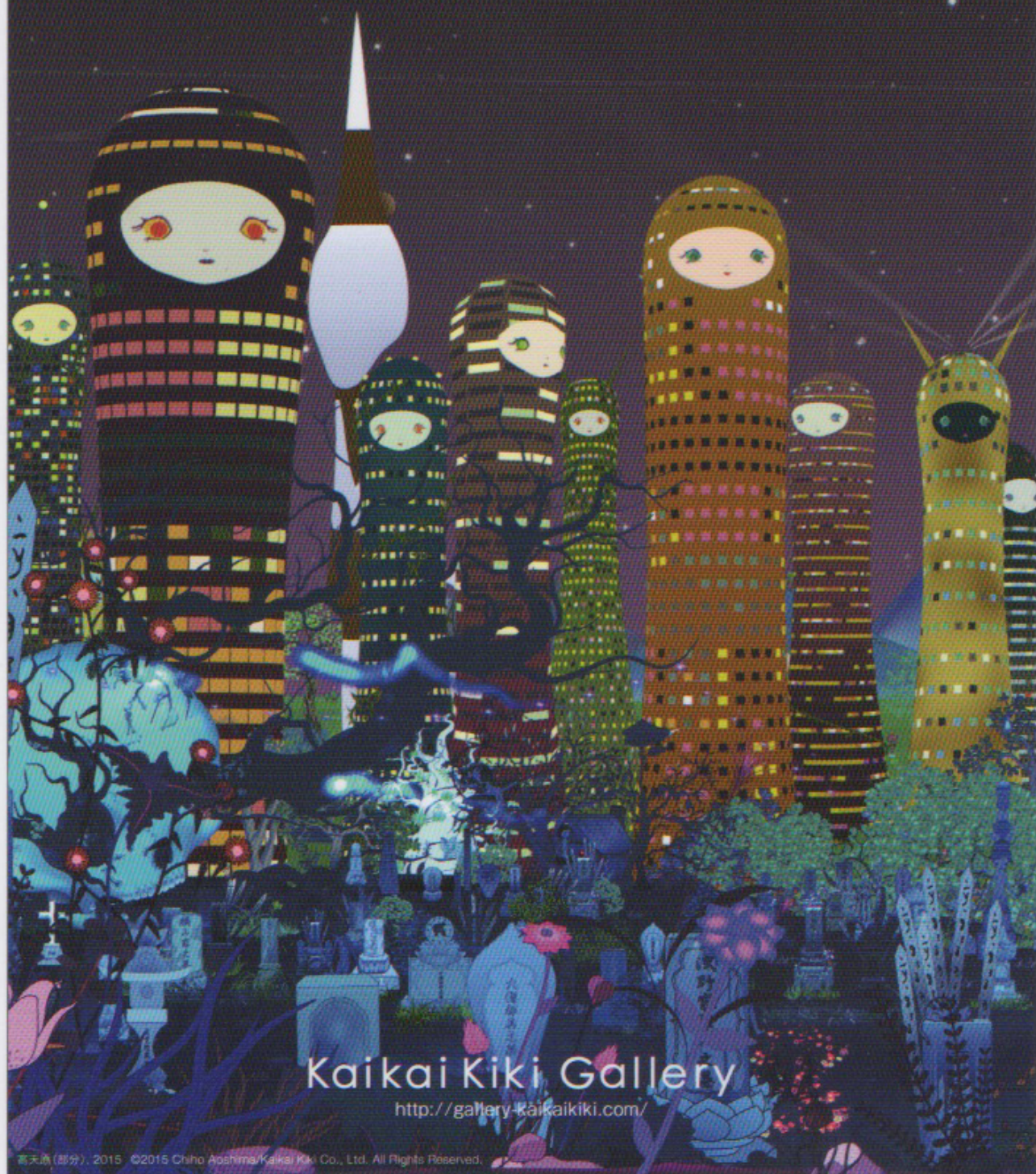


Chiho Aoshima  
REBIRTH OF THE WORLD

July 22 – August 18, 2016



Kaikai Kiki Gallery

<http://gallery-kaikaiiki.com/>

高天原(部分), 2015 ©2015 Chiho Aoshima/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

美術手帖(〇三十七号二〇一六年六月二日発行)毎月二回二日発行  
発行株式会社美術出版社 〒100-1802 東京都千代田区五番町四五 電話〇三(三三三)四二五三(営業)〇三(三三三)四二五五(編集)

美術出版社 定価(本体1,600円+税)

雑誌 07611-06



4910076110663

01600



# BERLIN

## Germany



女性を対象にしたデジタル技術とエンパワーメントの講習の様子 © Sebastian Bolesch / Haus der Kulturen der Welt

## 難民への教育的支援プロジェクト

**中** 東やアフリカ、南アジアなどで起きる内戦やテロ、迫害や貧困から国を逃れて、人々がヨーロッパを目指す。難民の対応への各国の温度差、破綻し始める政策、経済的な影響など、状況は極めて困難だ。昨年のドイツの難民申請者の数は、およそ110万人。国内では難民の受け入れに対して賛否両論が巻き起こっている。

しかしそうしたなか、ベルリンでは美術館や劇場、ネット上でのアーティストやアート関係者らによる難民支援のプロジェクトが、多数行われている。

まず今年3月、視覚芸術、映画、音楽などの総合芸術施設・世界文化会館で難民支援イベント「Civil Society 4.0」が開催された。難民、ボランティア、活動家、デジタル・ディベロッパーやアーティストらが、ともに難民の生活条件を改善すべく、3日間にわたり討論会や様々なワークショップを展開した。世界文化会館では2年前から、ベルリン市内の難民シェルターなど7か所の団体と連携し、小規模のイベントを行ってきた。そのなかで、難民にとって新たな土地でデジタル・ツールを使い、自身の生活を形成していくことの重要性が見えてきたという。そこで今回は、難民を対象に、デジタル・ツールの使用方法を指導するワークショップが行われた。ここでは、「refugees (難民)」という言葉はほとんど使われず、主催者たちは「newcomers (ニューカマー)」を歓迎。イベントの最終報告は政治家へと送られ、ここから始まったプロジェクトは自己組織化・継続していく。

一方、ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学では、同学教授で社会的な主題を軸に制作するアーティストのウルフ・アミンデが先導し、学内に難民のための進学準備コース「\*foundationClass」(ファンデーションクラス)を設立した。母国でアートを学んでいたが中断したり、ドイツの芸術大学に入学したいがポートフォリオやドキュメントなどを失ってしまったアーティストたちのために、それらを再作成したり、



「Cucula」の活動より、家具制作の様子 © Sally Lazic

大学受験のための授業を行う。5月から、40人が参加することが決まっている。授業料は無料だ。教師陣も、難民や移民というバックグラウンドを持つアーティストなどが選ばれている。一時的な難民支援ではなく、彼らの未来を見据えた根本的な取り組みであると同時に、美術大学という組織そのものを再考し、風穴をあけ、学部の子学生たちとの交流による互いの影響も促す試みといえる。

こうした難民たちの教育的な支援プログラムとしてより実践的に稼働しているのが、クラフトデザインのパイロット事業、「Cucula」だ。イタリアの工業デザイナー、エンツォ・マーリから承諾を得て、彼のデザインによる椅子やテーブルなどの家具を制作し、販売している。その家具の販売で得た収入は、難民の教育や生活費に投資される。「Cucula」とはアフリカの中西部で用いられるハウサ語で「何かを一緒にする」という意味。そこには、難民の「ために」するのではなく、難民と「ともに」するという意思がある。また、オラファー・エリアソン、振付家のサシャ・ヴァルツ、俳優のロベルト・シュタットローバーなどがアンバサダー(大使)を務めており、多くの著名人によってサポートされている。「iF パブリック・バリュー・アワード2016」も受賞した。

これらの「コミュニティ」が、今後どのように機能し、社会に影響を与えていくのだろうか。アーティストとその周辺の人々による難民支援の波は、確実に広がっている。